

パスワードの使い回しに繋がる要因検討と予防策の提案

中井 梨恵子

日常生活でパスワードの作成を求められる機会は多い。複数のサイトでパスワードの登録を求められることが多い状況の中で、サイトごとにパスワードを作ることは覚えることの大変さや面倒さから忌避されやすく、同一のパスワードを使い回している人は多い。しかし、パスワードを使い回していると、一つのサイトからパスワードが漏洩した際の被害が大きくなるため、パスワードの使い回しは安全のためには避けるべきである。そこで本研究ではパスワードの使い回しに焦点を当て、2つのオンライン調査を行った。

研究Ⅰでは、開示する個人情報の程度が異なる3つの架空サイトを用意し、実際にアカウントを登録するという想定でそれぞれについてパスワードを作成させた。その後、普段の使い回し頻度や、使い回しによって被害が起こった場合の深刻度、被害に遭う可能性などについて尋ねた。サンプル数は111名であった。作成された3種類のパスワードに対する使い回し状況によって参加者を群分けし、使い回しに繋がる要因を検討した。その結果、3サイト全てで同一のパスワードを使い回した人は、パスワードを使い回すことによる深刻度を高く評価した一方で、実際に自分が被害に遭う可能性については低く考えており、強度の高いパスワードを作成していた。一方、使い回しをしなかった人は長いパスワードを作成していた。

研究Ⅱでは、防護動機理論に基づき、パスワードの使い回しを防止させるような資料を3種類用意し、そのいずれかを読ませた後に研究Ⅰと同じパスワード作成課題を課した。パスワード作成前に読ませた資料の違いによってパスワードの使い回しを予防できるか検討することを目的としており、サンプル数は104名であった。資料は、パスワードの使い回しによって深刻な被害に遭うことや誰でも被害に遭う可能性があることを説明することで「深刻さ」、「脆弱性」、「恐怖」を高めることを目的とした資料A、それらに加えてパスワードの使い分けが被害を効果的に抑えられることを示すことで「反応効果性」を高めることを目的とした資料B、さらに加えて、使い回さず覚えやすいパスワードの作成方法を示すことで「自己効力」を高め、「コスト」の認知を減らすことを目的とした資料Cの3種類を用意した。分析の結果、資料Cを読んだ参加者は、他の資料を読んだ参加者より今後使い回しをしないでおこうという意図が強かった。また資料Bや資料Cを読んだ人は強いパスワードを作成した。ただし、実際に作成してもらった3つのパスワードにおける使い回し状況に関しては、事前に読ませた資料による違いが現れなかった。

両研究の結果から、パスワードを使い回す人は、使い回しによる被害の深刻さについて理解している上で、サイトごとに異なるパスワードを運用することの難しさを障壁と考えていることから使い回しをしていると考えられる。なお研究Ⅱでは、資料Cを読んだ参加者は使い回しをしないでおこうという意図が高く、全体の傾向として、将来の使い回し意図に影響する要因は、被害への恐怖とパスワードの使い分けに対する自己効力感が有意だった。すなわち、資料の内容をもう少し実現しやすいものにして自己効力感を高めることで、使い回さないという意図を高め、実際の行動に繋がられる可能性がある。そのため、より効果のある資料内容や提示方法について研究する余地があるといえる。（安全行動学）